(五) 其　他

(イ) フアツショ粉碎闘爭

同盟内部に於けるフアツショ派の粉碎に就いては別項に報告の通りであるが、最近の國際的傾向に合流して擡頭せるこの反動傾向は凡ゆる色彩をもつて、凡ゆる方面に擡頭しつゝある。從つて我が同盟は黨並に友誼團體と協力してかくの如き一切の傾向と勇敢に闘爭した。

特に日本勞働組合會議の結成大會に於ては、その内部にフアツショ傾向の含まれてゐる關係上、大會決議をもつてフアツショ粉碎の立場を明確すべきことを要求して戰ひ、我國の組織勞働層へのフアツショ傾向の侵入と戰つた。

その他、内部的には、機關紙の凡ゆる機關を通じて、フアツショの正體バクロとその粉碎の必要を組合員に徹底せしむべく努力した。

(ロ) 戰爭反對闘爭

滿蒙戰爭を合理化せんとすることを重要な使命とせるフアツショ派との闘爭は、直ちに戰爭反對闘爭とも一致するものであるが、特に我が全國勞働は、黨と協力して選擧戰、演說會その他の機會を通じて戰爭反對の闘爭を行ひ、職場に於ては兵役應召者の手當要求と除隊後の就業保證並に家族救濟等の要求をかゝげて戰つた。八月一日反戰デーに際しては、本部より指令を發して、全國勞働の階級的立場より反戰闘爭を敢行すべく努力した。

(ハ) 栃木再建闘爭

本年一月九日未明に栃木縣鹽谷郡阿久津村に於て突發せる謂ゆる阿久津村事件は、遂に反動暴力團日本生産黨のゴロツキ三名を殺しその他十數名に重傷を負はせたのであつたが、この事件の結果は、栃木縣下に於ける全國勞農大衆黨の組織と我が全國勞働の組織は一時壞滅をさへ傳へられた。小作爭議に端を發したこの事件は、中小資本家地主のフアツショ的前衛隊たる生産黨との亂闘であつたことは、我國に於けるフアツショ的反動暴力團との第一回の決戰として歴史的な意義を有するものである。從つて亂闘後官憲の彈壓は栃木縣下の全同志に加へられ、一時は三百名の同志は獄舍に呻吟したのであつたが、我等は大衆黨本部と協力してこの彈壓下にある栃木の同志救援と黨並に組合の栃木聯合會再建のために應援闘士を派遣して勇敢に戰つた。その後數ケ月、我等の努力は報ひられて、黨並に組合の從來の組織は全く再建され、犠牲者家族救援闘爭は今尚ほ着々と進められつゝある。尚ほ五月十九日右事件豫審は終結し、同志百八名に有罪の宣告が與へられたが、我が栃木聯合會は執拗なる公判闘爭を通じて、同志の救援闘爭を續けてゐる。右百八名の罪名内容は、騒擾首魁二十一名、首魁幇助四名、殺人及殺人未遂十三名、傷害十二名、卒先助成八十名、附和雷同六名であつて、首魁が最多數を占むるといふ彈壓である。

とにかくこの事件は、その原因は生産黨の暴力的脅威とこれに對する栃木官憲の態度にあるのであつて、事件の責任の一半は明らかに彼等の負ふべきものであるが故に、更に我等は今後とも黨と協力してこの問題を戰ひ拔かねばならない。

(ニ) 東北飢饉救援闘爭

昨年度に於ける北海道と東北地方の飢饉は、打續く農村不況と同地方農民の滿洲戰線への動員等と相俟つて、東北、北海道一帶を極度の飢饉狀態におとし入れた。我等はこの地方の飢饉救援闘爭のために、黨本部と協力し、基金募集、慰問委員派遣等の闘爭に參加して戰つた。

全國勞働昭和七年度役員

◇中央委員長　河上丈太郎
◇主事兼會計　菊川忠雄
◇中央委員　井上良二
山口常次郎
鈴木悦次郎
鶴五三
菊川忠雄
芽野眞好
植田重義
高梨二夫
高橋松次
久下本有
小松原光太郎

◇關西事務局長　高橋松次
同　主任　山口常次郎
同　財政部長　寺西藤三郎
同　常任　村上宇三郎

◇專門部長
政治部長　河上丈太郎
爭議部長　山口常次郎
組織宣傳部長　小松原光太郎
教育部長　菊川忠雄
出版部長　内田佐久郎
調査部長　河野密
婦人部長　岩内とみえ
國際部長　井上良二
法律部長　田萬清臣

◇顧問　高野岩三郎
棚橋小虎